難治性慢性咳嗽への挑戦：疾患特異的病態と非特異的難治化病態へのアプローチ

新実　彰男
名古屋市立大学大学院医学研究科 呼吸器・免疫アレルギー内科学

慢性咳嗽の診断と治療には，Irwinらが提唱したanatomic diagnostic protocol，即ち咳受容体と知覚神経線維の解剖学的局在から「原因疾患を想定し，それを治療する」戦略が用いられてきた。それに基づいて診断した本邦の慢性咳嗽の主要な原因疾患は，咳喘息，副鼻腔気管支症候群，GERD，アトピー咳嗽などであるが，現実には他疾患への合併が多いGERDを含む複数の原因疾患を想定して最大限治療しても改善不十分な患者は少なくない。また原因を明らかにし得ないunexplained coughも経験される。

講演では，かかる難治病態への演者らのアプローチ（咳喘息における「混合性炎症」，増加するGERDの幅広い咳病態への寄与［咳とGERDの悪循環，消化管運動不全の重要性］，咳と下気道リモデリング，上気道病態との関連など）を紹介し，近年提唱されたcough hypersensitivity syndromeにも言及する。